

## 編集後記

私が住んでいる小田原には観光アプリ「小田原さんぽ」があります。私はスマホにダウンロードした「小田原さんぽ」をチェックしながら市内の散歩を楽しんでいます。小田原は街全体が「総構」と呼ばれるお城なのでまだ全然小田原市全域を散歩しきれていません。好みのルートには何度も訪れています。私は総構の北西の境界に住んでいますが、近くには坂下張出という曲輪があります。南の方を散歩すると、浜町の蓮上院の辺りに東南の端の土塁が残っています。今は5mくらいの高さですが、北条の時代には15mくらいあったようです。国立病院機構箱根病院の近くには早川が流れており、少し下流の上板橋には早川上水の取水口があります。上水道です。小田原には北条の時代からすでに上水道がありました。日本最古の上水道です。この上水道はかまほこ通りの辺りを通して東西に流れていました。早川上水の構造は1590年くらいに徳川家康によって江戸に持ち込まれ、後の神田上水とか玉川上水のモデルになっています。かまほこ通りを東の方に歩くと、昔の水路の上が暗渠になって道路になっているのがわかります。昔この小道は水路だったんだと思いながら歩くわけです。小田原の道は細かくグニャグニャしていますが、これには昔の水路の流れが関係しています。私は別の街を訪れて似

た風景や街の構造を見た時、「ここは昔水路で今は暗渠になっているのではないか」と推察します。直感的に「ここは小田原のかまほこ通りの辺りに似ている」と感じながら歩いているわけです。

私は「臨床神経学」の症例報告を読むことによって、今まで何度も同じような既視感を経験してきました。患者さんの赤く腫れた耳介を見て「この耳介は臨床神経学に出ていた再発性多発軟骨炎の耳介じゃないですか？」と後輩に言われたり、大腿部の筋痛を訴える患者さんの血液検査でALPの異常高値から骨軟化症性ミオパチーを思い浮かべたり、その数は数え切れません。患者さんを診察した時に「この患者さんは臨床神経学のあの症例報告に似ている」という風に思い出すわけです。その第一印象が当たる確率は極めて高率です。臨床経験の積み重ねは生涯続きます。読者の皆さんは臨床神経学の症例報告を読むことによって、まだ診ぬ患者さんに会ってください。投稿者の皆さんは有為な読者に新患を体験していただくつもりで、どんどん本誌に投稿してください。皆さんの投稿をお待ちしています。

(今井富裕)

### 〈編集委員〉

編集委員長 小野寺 理 編集副委員長 三澤 園子  
編集幹事 石浦 浩之 漆谷 真 杉江 和馬  
編集委員 今井 富裕 木下 真幸子 古賀 政利 櫻井 圭太 柴田 護  
下畑 享良 鈴木 匡子 辻野 彰 坪井 義夫 中嶋 秀人 新野 正明

「臨床神経学」 第64巻 第5号 2024年5月1日発行  
編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会  
発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 西山 和利  
印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>